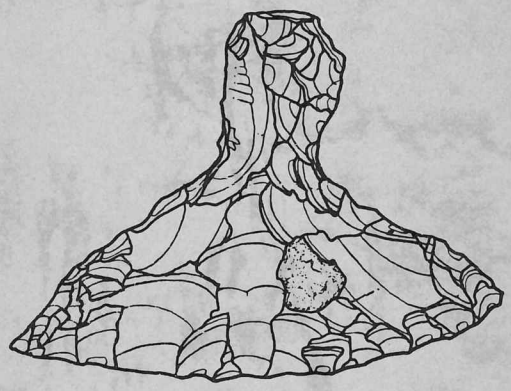
1981

# 五　斗　代　B

長野県佐久市香坂五斗代B遺跡発掘調査報告書



昭和56年3月

長野県佐久市教育委員会

巻頭図版

# 例　　言

1．本書は、昭和55年８月13日～同年９月６日までにわたって調査された、長野県佐久市大字香坂字五斗代に所在する、五斗代Ｂ遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、交通公社総合開発株式会社の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3．本調査は、林幸彦を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員とした。

4．本書に挿入した土器拓影は、井上行雄、大井今朝太、森泉定勝により、石器実測及びトレスは、堤　隆が行なった。

5．本書に掲載した写真は、本橋宏己、林幸彦が撮影したものを使用した。

6．本書の執筆は文責を文末に記した。

7．本書の編集は、堤　隆が行ない、浅沼馨が校閲した。

8．本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また調査・報告にあたっては交通公社総合開発株式会社に御理解、御協力をいただき、臼田武正、児玉卓文、佐藤信之、白倉盛男、鈴木次郎、藤沢平治各氏には適切な御指導をいただいた。御芳名を記して厚く御礼申し上げます。

# 凡　　例

1．地形図縮尺は$\frac{1}{1000}$、礫群実測図縮尺は$\frac{1}{60}$である。

2．出土遺物実測図は、石器は$\frac{1}{2}$、一部の石器が$\frac{1}{3}$、土器はすべて$\frac{1}{4}$である。

3．礫群中の遺物の出土番号、図の遺物番号、遺物一覧表の番号はすべて共通である。

4．土器図中番号の横にはその出土位置を示した。例えば、礫、は礫群内出土、○○グは、○○グリット出土の略号である。

5．水系レベルは標高を記した。

6．石器の実測については、三角法を用いた。ただし紙面の都合上片面のみを図に載せた石器もある。

7．出土遺物図版は、石器$\frac{2}{3}$、一部の石器が$\frac{1}{3}$、土器はすべて$\frac{1}{3}$である。

# 本　文　目　次

例　言　　凡　例　　本文目次　　付表目次　　挿図目次

Ⅰ　発掘調査の経緯

1　発掘調査に全る動機……1

2　発掘調査の概要……2

Ⅱ　遺跡の位置と環境……4

Ⅲ　遺構と遺物

1　礫群……7

2　土器……8

3　石器……17

Ⅳ　総　括……19

引用参考文献……20

# 付　表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表……2

第2表　作業行程表……2

第3表　出土石器一覧表……13

# 挿　図　目　次

第1図　五斗代B遺跡の位置……1

第2図　地形及び発掘区設定図……3

第3図　礫群実測図……5・6

第4図　出土土器拓影図……11

第5図　出土土器拓影図……12

第6図　出土石器実測図……14

第7図　出土石器実測図……15

第8図　出土石器実測図……16

第9図　出土土器及び参考資料拓影図……22

# 図　版　目　次

巻頭図版　遺跡付近航空写真

図版1　1・2礫群

図版2　1・2発掘区

3・4・5・6石器出土状態

図版3　出土土器

図版4　出土土器

図版5　1・2出土土器

図版5　3出土石器

図版6　出土石器

図版7　出土石器

図版8　発掘調査スナップ

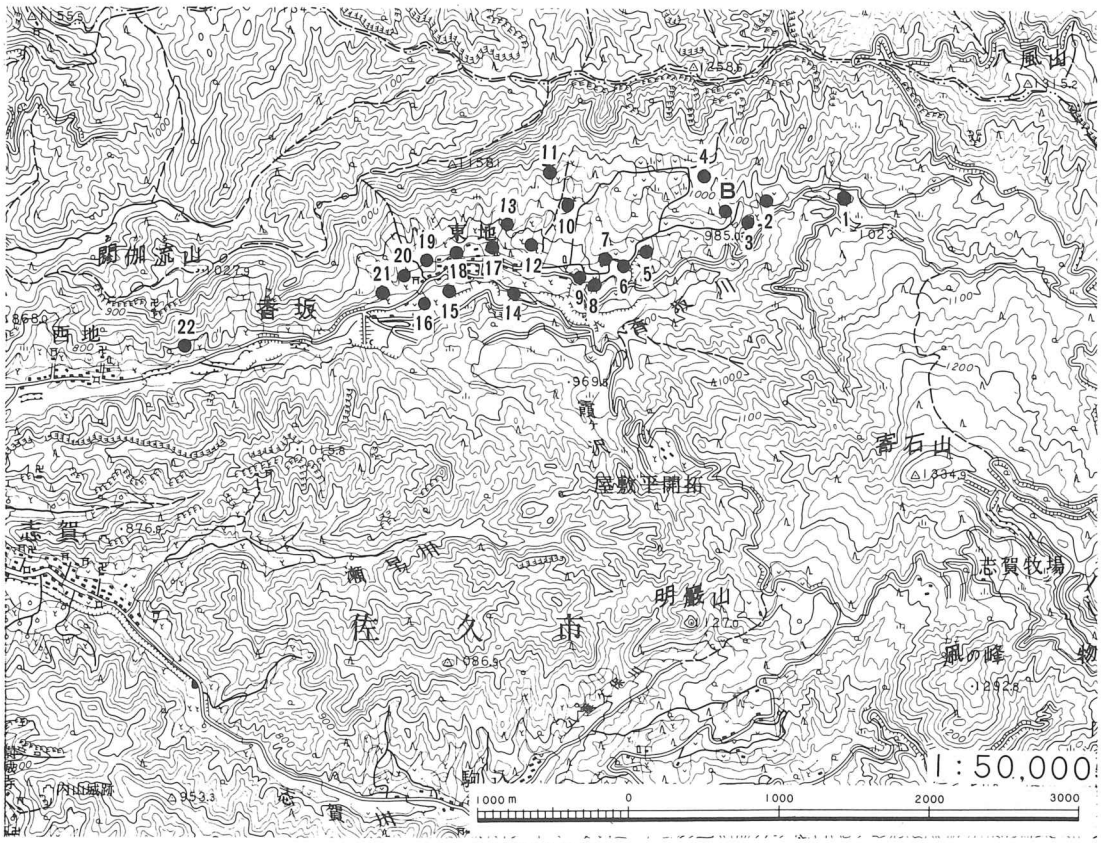
# Ⅰ　発掘調査の経緯

## 1　調査に至る動機

五斗代Ｂ遺跡は、佐久市大字香坂字五斗代に所在する。近隣には、曲尾遺跡、吹付遺跡、雨原遺跡等がある。

本遺跡は、交通公社総合開発株式会社によるリゾート計画の一環である道路拡幅工事、、キャンプ施設設施に伴い、昭和54年度に１度隣接した兵士山遺跡とともに調査をみたが、さらに充実した追調査が必要となり、今回緊急に記録保存調査をとりおこなう次第となった。

佐久市教育委員会は調査団長を浅沼馨、調査担当者を林幸彦とし、佐久考古学会有志の協力を得て、昭和55年８月13日より調査を実施した。　　（事務局）




Ｂは五斗代Ｂ遺跡
第１図　五斗代Ｂ遺跡位置図

第1表　周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 雨原A | 縄文・平安 | 12 | 鶉尾根 | 縄文 |
| 2 | 雨原B | 縄文・平安 | 13 | 東林 | 縄文・平安 |
| 3 | 兵士山 | 縄文・平安 | 14 | 西片貝 | 縄文 |
| 4 | 五斗代 | 縄文 | 15 | 小屋場 | 縄文・平安 |
| 5 | 木戸平B | 縄文・弥生 | 16 | 屋敷前 | 縄文・弥生・平安 |
| 6 | 木戸平A | 縄文・平安 | 17 | 裏林 | 縄文・弥生・平安 |
| 7 | 吹付 | 縄文 | 18 | 干草場 | 縄文・平安 |
| 8 | 曲尾 | 縄文・平安 | 19 | 城の口 | 縄文・平安 |
| 9 | 中原 | 縄文・平安 | 20 | 東ねぶた | 縄文・平安 |
| 10 | 仙太郎 | 縄文・平安 | 21 | 西ねぶた | 縄文・平安 |
| 11 | 鶉尾根北 | 縄文・平安 | 22 | 大比羅 | 平安 |

## 2　調査の概要

●遺跡名　　五斗代B遺跡

●所在地　　長野県佐久市大字香坂字五斗代

●調査期間　　昭和55年8月13日～同年9月6日

●調査に関する事務局組織は下記のとおりである。

市川　弥四郎　　佐久市教育委員会教育次長　　堀内　美喜男　　同　　社会教育係

臼田　幸作　　同　　社会教育課長　　林　幸彦　　同　　社会教育係

井出　喜平　　同　　社会教育係長

●調査団構成は下記のとおりである。

団　　長　　浅沼　馨　（佐久市教育委員会教育長）

調査担当者　　林　幸彦　（佐久市教育委員会社会教育係）

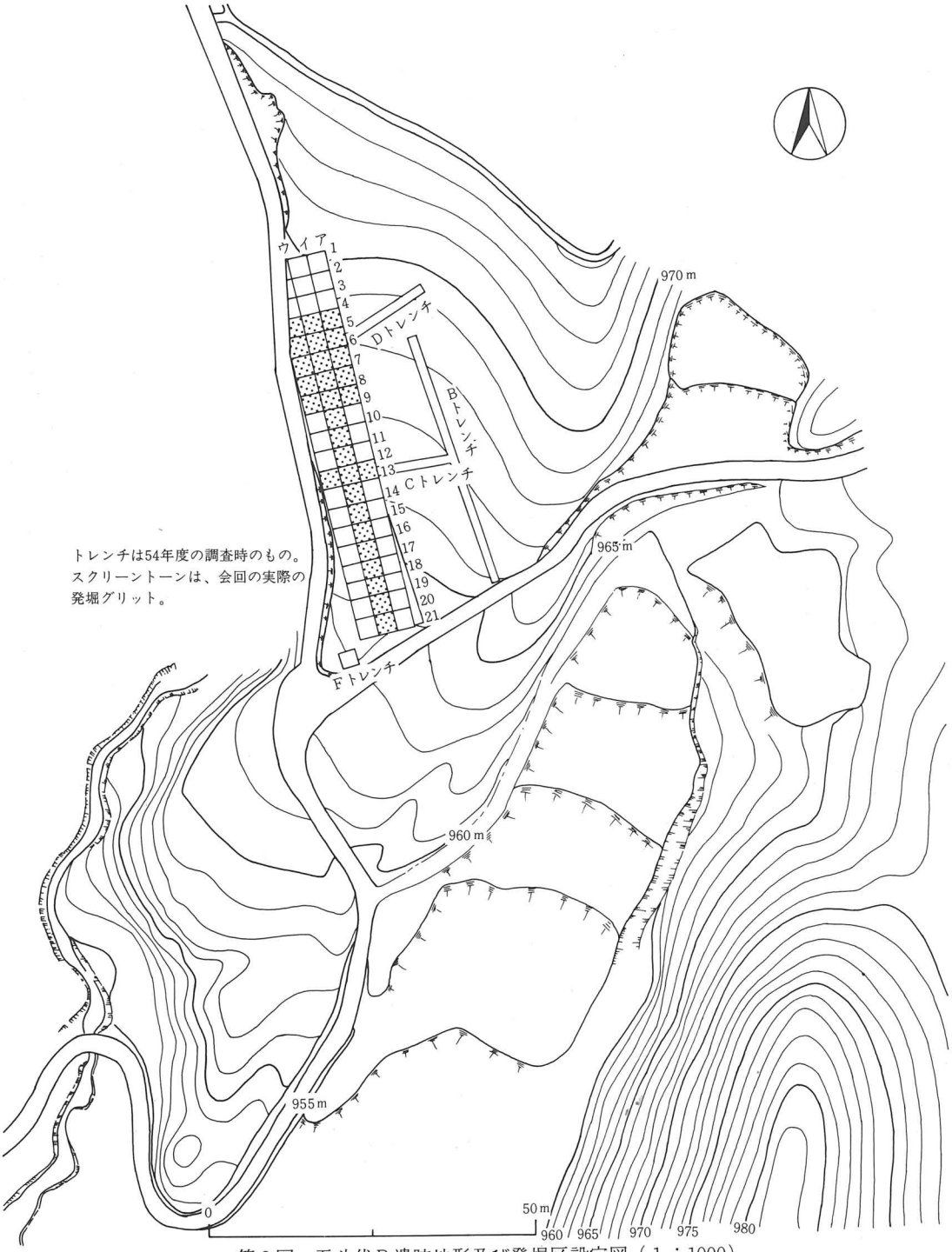
調　査　員　　井上行雄・大井今朝太・工藤かよ子・羽毛田伸博・森泉定勝

調査補助員　飯島　篤・五十嵐博子・小山岳夫・佐々木宗昭・堤　隆・三石宗一

村上幸代・本橋宏巳　　（以上　アイウエオ順　敬称略）

第2表　作業行程表

| 日付 | 天気 | 作業 | 調査内容 | 日付 | 天気 | 作業 | 調査内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8月15日 | 晴れ | 半日 | 器材運搬、グリット設定 | 8月23日 | くもり | 全日 | 礫群精査 |
| 8月16日 | 雨 | 半日 | 表土はぎ | 8月24日 | 晴れ | 全日 | 礫群精査 |
| 8月17日 | くもり | 全日 | 礫群を確認 | 8月25日 | 晴れ | 全日 | 礫群精査 |
| 8月18日 | くもり | 全日 | 礫群プラン追求 | 8月27日 | 晴れ | 全日 | 遺物のドットマッピング |
| 8月19日 | 晴れ | 全日 | 礫群プラン追求 | 8月28日 | 晴れ | 全日 | 全体測量、写真撮影 |
| 8月20日 | 雨 | 半日 | 礫群の平板測量開始 | 8月29日 | くもり | 全日 | 器材撤収 |
| 8月21日 | くもり | 全日 | 礫群精査 | 他の調査期日は関連調査を行なった。 | | | |




第２図　五斗代Ｂ遺跡地形及び発掘区設定図（１：1000）

# Ⅱ　遺跡の位置と環境

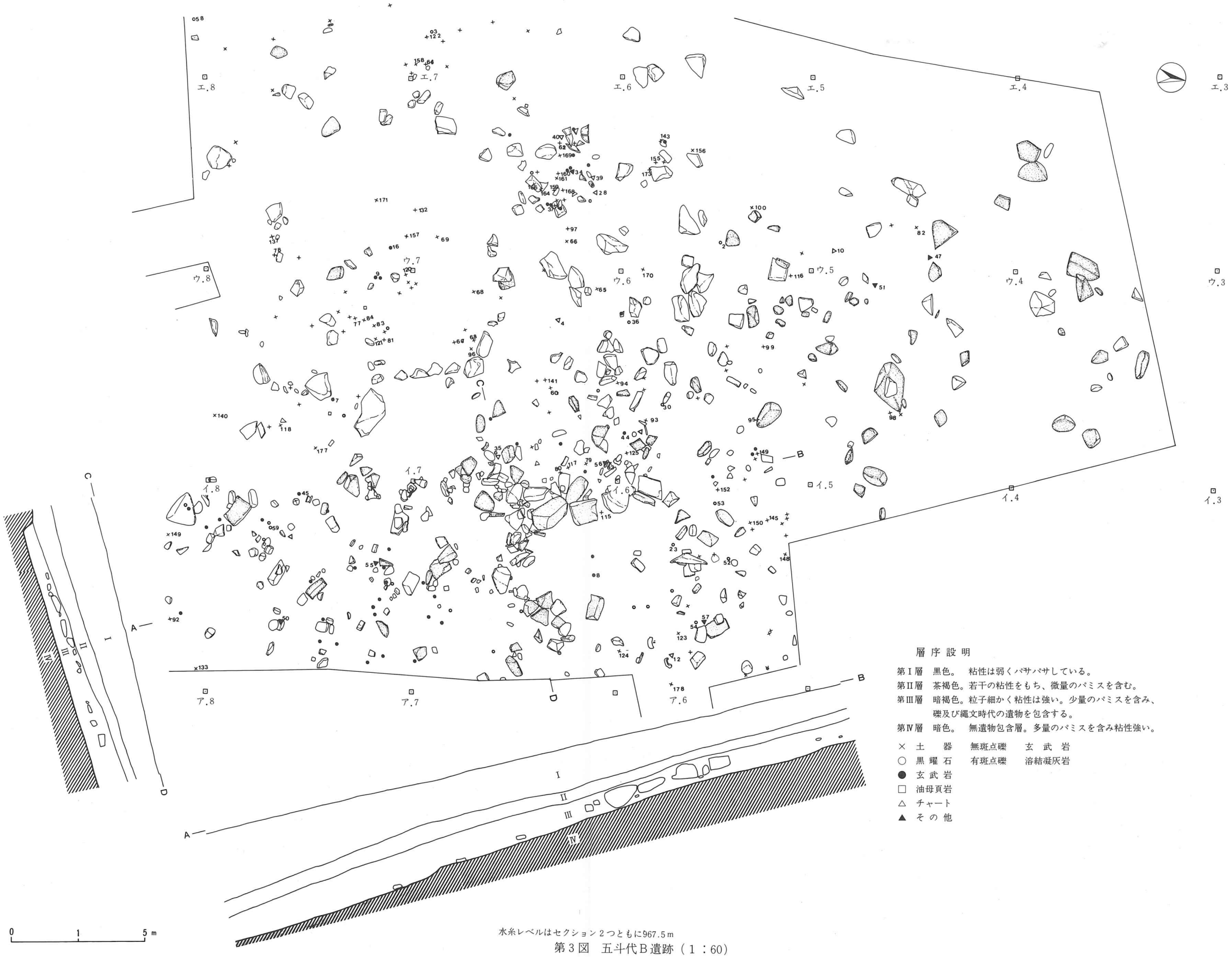
五斗代Ｂ遺跡は、佐久市大字香坂に位置し標高　960　ｍを測る。佐久市は、東西28.3km、南北22.7km、総面積 193.1㎢を測る広域な市で佐久平の大部分を占める。この平のほぼ中央に千曲川が北流し、北方には浅間山がそびえ、西方には八ケ岳、蓼科山の連峯が、東方には関東山地の西北端にあたる荒船山や八風山が連なっている。東方の山地から西方へ流出する河川は、北から香坂川、瀬早川、志賀川があり内山狭谷からの内山川、滑津川に合流し、千曲川に注ぐ。本遺跡は八風山や矢川峠及び寄石山に源を発する香坂川の北岸で、山脚上の緩斜面をもった小平担面にあり比高は約20ｍを測る。香坂川の河床、源流付近より西地あたりまで深く浸食作用により渓谷を形成している。両岸には小規模な河岸段丘が形成され、さらに小河川によっていくつかに寸断されている。五斗代Ｂ遺跡の南東方向の沢は湿地で近年まで水田が営なまれていた。その沢をへだてて兵士山遺跡がある。また西方は沢となっている。北方には、閼伽流山より続く信州石英溶岩の露頭が見え岩壁を形づくっている。

香坂川流域に分布する遺跡は、雨原Ａ・Ｂ遺跡や曲尾遺跡等がある。（第１図、第１表）市内の平担地は弥生時代、古墳時代、平安時代の遺跡が主であり各々複合遺跡もみられ、縄文時代の遺跡は少ない。しかし、立地の異なるこの地域にあっては、主となるのは縄文時代の遺跡であり比較的平安時代の遺跡も多い。弥生時代の遺物は、２・３の遺跡に若干みられるだけである。

縄文時代は前期と後期の遺跡があり、兵士山遺跡で前期関山式土器、雨原Ａ・Ｂ、木戸平Ｂ、曲尾遺跡より前期とおもわれる繊維を含む土器片が、仙太郎、木戸平Ａ、鶉尾根、鶉尾根北遺跡曲尾遺跡より縄文中期の加曽利Ｅ式土器片等がそれぞれ表採されている。後期で顕著なのは、曲尾遺跡で堀内式土器片が多く出土している。弥生時代は後期の箱清水式土器が曲尾・木戸平Ａ・Ｂ遺跡より少量であるが表採されている。古墳時代では、曲尾遺跡で鬼高期の土器が表採されている他は明確なものは確認されていない。平安時代になると遺跡数は増す。兵士山、五斗代Ｂ、五斗代、仙太郎、雨原Ａ、木戸平Ａ、曲尾遺跡で国分期の土師器、須恵器が表採されている。

以上この地域の遺跡を概述したが、縄文、弥生、古墳、平安時代の各時代にわたった多量の遺物の出土する曲尾遺跡は特に注目される。また、標高1000ｍに近い高所の弥生時代の遺跡の存在は、軽井沢町の県遺跡、南牧村の矢出川遺跡、南相木村の宮向遺跡等と共に、標高及び佐久地方と隣地方との峠道に位置するという点で注意されねばなかろう。

（林幸彦）




層序説明

第Ⅰ層　黒色。　粘性は弱くパサパサしている。
第Ⅱ層　茶褐色。若干の粘性をもち、微量のパミスを含む。
第Ⅲ層　暗褐色。粒子細かく粘性は強い。少量のパミスを含み、礫及び縄文時代の遺物を包含する。
第Ⅳ層　暗色。　無遺物包含層。多量のパミスを含み粘性強い。

× 土　器　　無斑点礫　　玄　武　岩
○ 黒 曜 石　　有斑点礫　　溶結凝灰岩
● 玄 武 岩
□ 油母頁岩
△ チャート
▲ そ の 他

水糸レベルはセクション２つともに967.5m

第３図　五斗代Ｂ遺跡（１：60）

# Ⅲ　遺構と遺物

## 1　礫　群（第３図、図版１、図版２）

礫群は、第Ⅲ層より検出された。礫は玄武岩礫及び、溶結凝灰岩礫より構成されている。これら２種類の岩石は荒船火山の所産と考えられる。玄武岩礫は付近の山塊より、溶結凝灰岩礫は付近の沢より比較的簡単に入手できるものであり、本礫群もそうした所からの搬入石材とみることができよう。（註１）

礫群のあり方は配石と呼べるような規則的なものではなく、玄武岩と溶結疑灰岩という材質の差を、意識して撰り分けたような様子もなく、比較的無雑作ともいえる状態であった。しかし、イ－６グリットに関しては環状とでも形容すべき集中がみられた。また個々の礫についても加熱加工等なんらかの処理の施こしてあるものもこれといってみあたらなかった。換言するならこれらの礫は搬入時そのままの状態をとどめているといってよいだろう。また礫をとり除いた後にも掘り込み等はみあたらなかった。

礫群内からは多量の遺物が出土した。土器・石器は礫群内に散布していた。

土器は、縄文早期、縄文前期花積下層期、黒浜期、諸磯Ａ・Ｂ・Ｃ期、縄文中期勝坂期、縄文後期に比定されるものであった。このうち早中後期の土器片は少数であり、そのほとんどが前期土器片であった。このことから、本礫群の該期が縄文時代前期であることは推定に難くない。しかし前期の個々の時期において礫群との強い関連を示す土器はこれといってなく、したがって本礫群が前期のいずれか、あるいは複数期にまたがって機能していたかは決定し難い。

礫群内から出土した石器は、縄文時代の代表的なものばかりであった。このうち玄武岩製の石器が多いことは、玄武岩礫が石器の石材として多用されたことを示している。さらに石器中に石核が７つ存在した。また玄武岩破片等は千数百点を数えたのに対し、完成品としての石器は意外に少なかった。これは製品としての機能をはたしうる場所へ持ち去られた事実を示すものであろう。

このように、本礫群が縄文時代前期、花積下層期、黒浜期、諸磯Ａ・Ｂ・Ｃ比定期のいずれか、あるいは複数期にまたがる石器製作に関連する遺構であることは明らかであろう。

（羽毛田伸博・堤　隆）

註１　玄武岩　　荒船火山最後の噴出物。その多くは山陵部に分布する。うずまき石と呼ばれ造園に多用されているのはこの玄武岩礫である。

溶結疑灰岩　　荒船火山の噴出物、安原石とも呼ばれ各種石材に用いられている。

以上、白倉盛男氏の御教示による。

## 2　土　器　（第4図　第5図　図版3　図版4　図版5）

### 第Ⅰ群土器　（第4図　60・61　図版3）

縄文時代前時前葉「木島式」に比定される。この他本遺跡では7片が確認された。

60は頚部に竹管刺突文がさらに口縁部には貝殻条痕文が、61は口縁に貝殻条痕文が施文され、双方ともに薄手できわめて焼成のよい土器である。

東海系「細線文指痕薄手土器」の1群である「木島式」は、併行期としてとらえられる関東の「花積下層式土器」とまったく対象的で、繊維を含まない焼成の良好な土器である。これら「細線文指痕薄手土器」文化は、縄文早期末に木曽川・天龍川水系を朔上してきたと考えられている。しかし、千曲川水系に於いては現在「木島式土器」は、本資料を加えて十数例しか検出されていない。（註1）

註1　児玉卓文氏の御教示による。

### 第Ⅱ群土器　（第4図　62～100　図版3）

縄文時代前期前葉「花積下層式」に比定される。

これらの土器群は胎土中に多量の繊維を含みもろい。60・64・70には結節羽状縄文が、63～89には単節斜縄文が施文されている。90～100 の器面の内外には条痕文が施こされている。

縄文時代前期前葉、前記したような東海系無繊維「細線文指痕薄手土器」と、繊維土器である「花積下層土器」が天龍川水系において共存することは周知である。（註1）しかし繊維土器の範疇である千曲川水系にあって東海系無繊維土器群がどのような様相を呈すかは明らかでない。

今後資料の増加をまって検討してゆきたい。

註1　こういった事例は南箕輪村「北高根A遺跡」や高遠町「宮の原遺跡」に認められる。

林　茂樹　1978　「高遠宮の原遺跡」

中央道遺跡調査団編　1972　「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－南箕輪村その1・2　北高根A」　日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会

### 第Ⅲ群土器　（第4図　101～108　図版3）

縄文時代前期黒浜式に比定される。

101・102・107 は同一個体であり、器表には無節縄文が施文されている。胎土中は若干の繊維

を含みもろい。104は口縁部を平行沈線によって菱形に区画した土器で、胎土中には繊維を含む。108 には、口縁部に半截竹管による爪形文が連続して施こされている。

本遺跡に近似性を示す資料に「巾田式」がある。

中部高地において黒浜併行期としてとらえられている土器群の中に、戸倉町巾田遺跡出土の土器を示準とする「巾田式」と、飯山市有尾遺跡の「有尾式」がある。この二者の差異は、巾田式が縄文前期初頭花積下層式土器の流れをひく東日本的な一般に繊維を含む土器であるのに対し、有尾式は西日本的様相を呈し、ほとんど繊維の混入がみられないことにある。この二者のさらに細かいちがいについては「編年」（1980　千曲川水系古代文化研究所）に述べられているところが詳しい。（註１）

千曲川という同一の水系にあって、縄文時代前期黒浜併行期に両者のような差異が認められるのは、「巾田期」、「有尾期」の時間的な若干のずれをしめすものであろうか？

註１　「編年」によると「巾田式」と「有尾式」の相異は次のようである。

巾田式では、多量の含繊維土器と、少量の繊維プラス砂粒を土器の粘土に混入されたタイプの深鉢形土器がセットをなしている。文様構成は口縁部施文帯とそれ以下の胴部施文帯に分かれ、上半部には半割竹管工具による、平行沈線の区画文（三角、ひし形）や、コンパス文あるいは爪形文が施文され、胴部下半は横方向の羽状縄文でうめられている。縄文のバラエティはやや少なくなり、無節あるいは単節の縄文が多い。器形は深鉢一本やりであるが、器形に大小が出てくるとともに、含繊維の量に変化があらわれてくる。一方「有尾式土器」は無繊維土器を主体としており、含繊維土器も少量のセットとしている。文様構成はほとんど有尾式土器に類似するが、上半部施文帯には半割竹管工具による連続刺突文や、爪形文による区画文（三角、ひし形）が特徴的である。胴下半部は縦方向の羽状縄文がみられ、「巾田式土器」よりは縄文にバラエティがある。

（筆者加筆修正）

## 第Ⅳ群土器　（第４図　109～119　図版４－１）

縄文時代前期諸磯A 期に比定される。

115 は櫛歯状工具を用いて平行沈線及び波状文を口縁部に施文したものである。また117・118には半截竹管工具による連続爪形文の２本の区画内に、櫛歯状工具によって波状文が施されている。112・113・114には単節斜縄文が施こされている。

## 第Ⅴ群土器　（第４図　120～131　図版４－２）

縄文時代前期後半諸磯B 期に比定される土器群である。

これらの土器片のすべてが浮線文といわれる細い粘土紐の上に刻みの入れられた文様帯をもち

焼成も良好である。129・130・131はこの刻みを持つ浮線文とソウメン状の貼り付け文によって文様が構成されている。120と121・126・127・128・129・130・131はそれぞれ同一個体と考えられる。

### 第Ⅵ群土器　（第4・5図　132～140　図版4－3）

縄文時代前期諸機C期に比定される土器群である。

132・135は同心円状に結節状浮線文が施こされた土器である。結節状浮線文は、細い粘土紐に半截竹管工具によって連続的な刺突を加えたものである。この2つの土器の胎土は若干の雲母を含み、焼成は良好である。133・136・は、いわゆるボタン状突起が貼り付けられている。137・138の土器は、カマボコ状の小突起と単節斜縄文が施こしてある。139は諸磯C期に特有な口縁部に耳たぶ状の貼り付けを施した土器である。従来これらの土器は中部高地において「下島式」と命名されている。

### 第Ⅶ群土器　（第5図　141～158　図版4－4）

縄文前期土器。詳しい時期については不明である。ただし143～153に関しては諸磯B期に比定されうる可能性もある。

143～153は同一個体でありR $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$ の単節斜縄文とL $\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$ の単節斜縄文が施文されている。154・155も同一個体と思われ、焼成は良好であり単節斜縄文が施こされている。156は胎土中に雲母を含み器厚は1㎝を計る。施文はR $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$ とL $\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$ の斜縄文により構成されている。

### 第Ⅷ群土器　（第5図　159～170　図版5－1）

縄文中期中葉、関東編年でいう勝坂式に比定されうる土器片である。

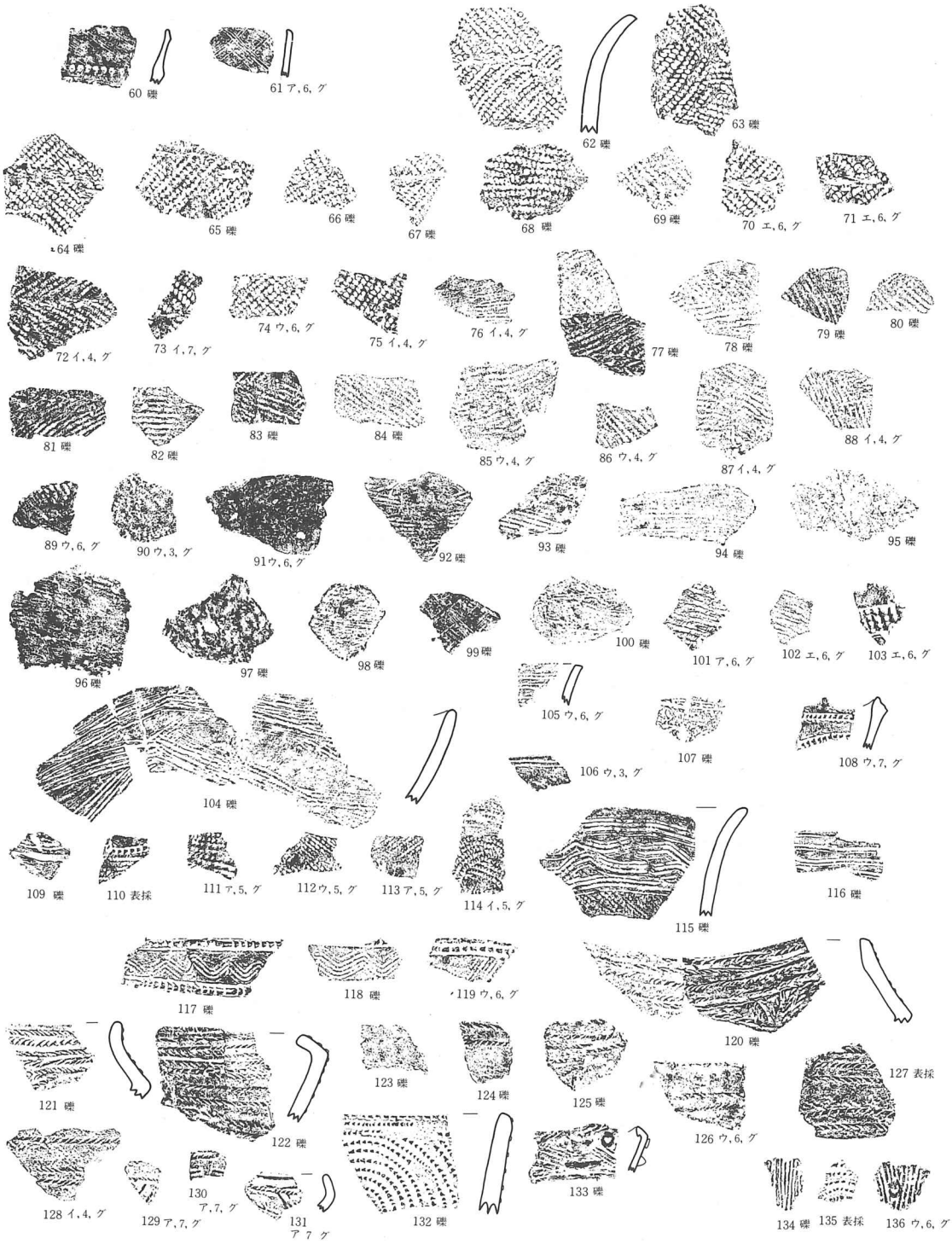
164には凸帯うずまきと沈線が施文され焼成は良好である。167・168は同一個体であり凸帯に縄文が施こされている。169・159は同一個体と考えられ、ミミズク状把手が特徴的である。これらの縄文中期の土器片の出土は、ウ・6グリット内にまとまりがみられた。

### 第Ⅸ群土器　（第5図　171～173　図版5－2）

縄文時代後期の土器片である。

171～173はともに器面がよく磨かれている。172・173は同一個体であり凸帯には縄文が施こされている。頚部の凸帯は縄文時代後期全般にわたってみられるものであり、これらの土器片の詳しい時期については類推できない。

尚、礫群内出土の縄文土器は第Ⅲ層出土、グリット内出土の縄文土器はすべて第Ⅱ層出土である。




第４図　五斗代Ｂ遺跡出土土器（１：４）

第五図　五斗代Ｂ遺跡出土土器（１：４）

## 第Ⅹ群土器　（第５図　174～176　図版５－２）

平安時代の須恵器片。176は底部。３片とも１層出土。

## ●隋円押型文土器（第９図　177・178）

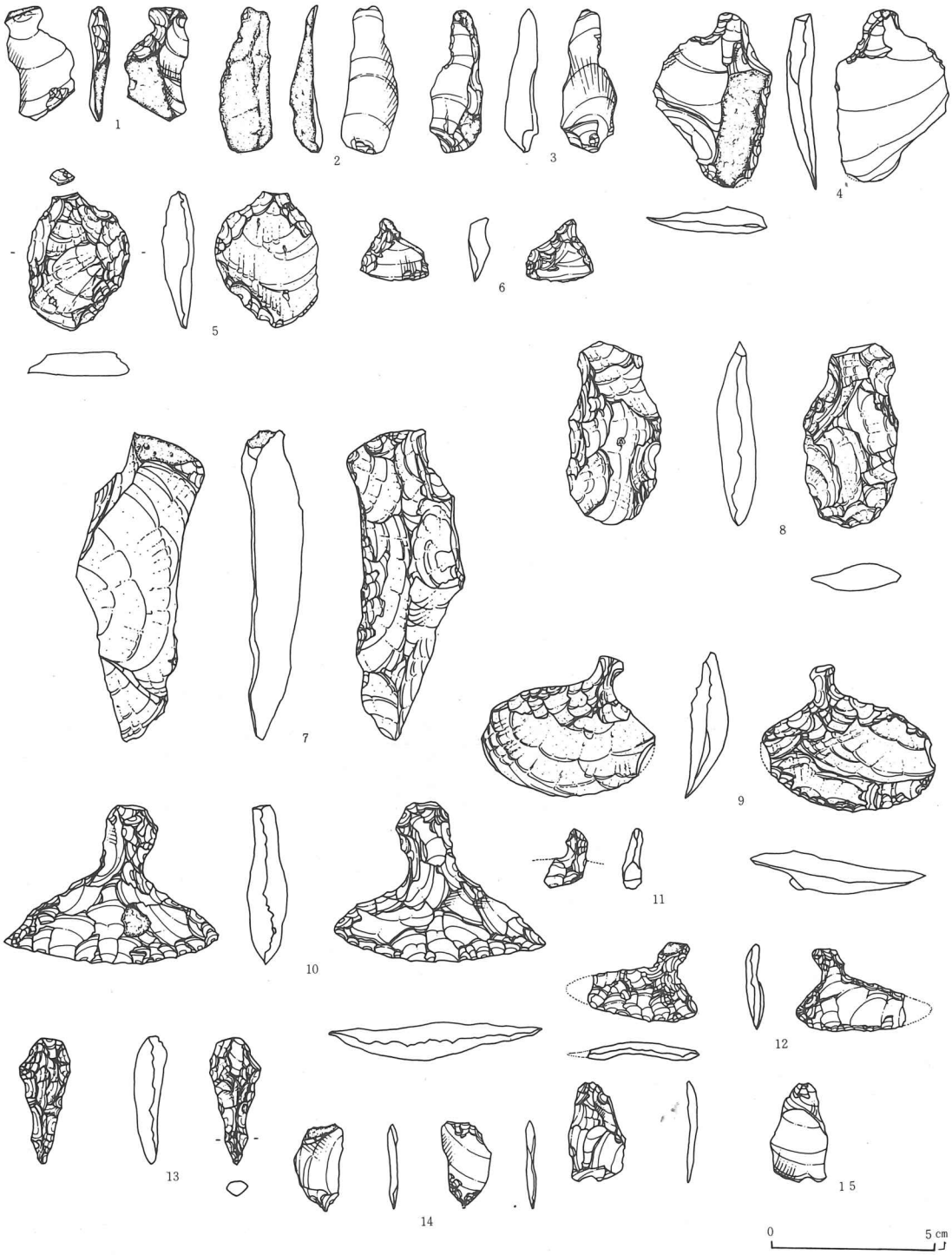
発掘資料としては佐久市初の縄文早期押型文土器。押型文土器は佐久市では、東立科A遺跡で数片表面採集されているのみで類例をみない。（第９図　a ～f ）しかし縄文早期の遺跡があるとすれば立科東麓または香坂川上流であろうことは予測されてきた。今後このような縄文早期の資料は除々に増加してゆくであろう。

（本橋宏巳　堤　隆）

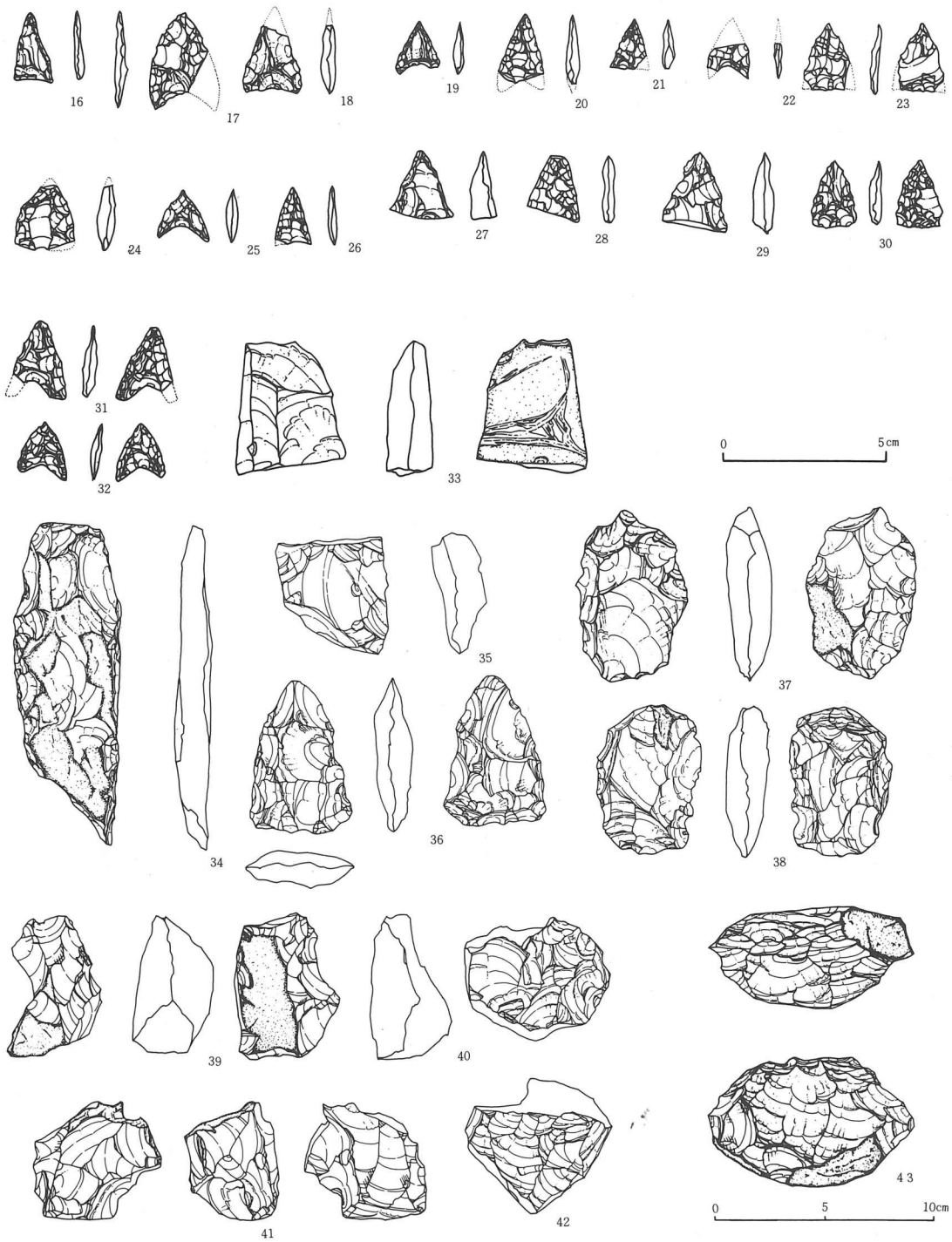
第３表　五斗代B遺跡出土石器一覧表

| 挿図番号 | 出土位置 | 石器名 | 石質 | 挿図番号 | 出土位置 | 石器名 | 石質 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ウ・５グリッド | 石匙 | 黒耀石 | 31 | ウ・５グリッド | 石鏃 | 玄武岩 |
| 2 | | フレイク | 黒耀石 | 32 | 不明 | 石鏃 | 黒耀石 |
| 3 | | フレイク | 黒耀石 | 33 | エ・７グリッド | 線刻のある石？ | 砂岩 |
| 4 | | 石匙 | チャート | 34 | | 打製石斧 | 砂岩 |
| 5 | ウ・５グリッド | 石匙 | 玄武岩 | 35 | | フレイク | チャート |
| 6 | ウ・４グリッド | 石匙 | 黒耀石 | 36 | | 打製石斧 | 玄武岩 |
| 7 | | スクレパー | 玄武岩 | 37 | | 打製石斧 | 玄武岩 |
| 8 | | 石匙 | 玄武岩 | 38 | イ・４グリッド | 打製石斧 | 玄武岩 |
| 9 | | 石匙 | 玄武岩 | 39 | | 石核 | チャート |
| 10 | | 石匙 | チャート | 40 | | 石核 | チャート |
| 11 | ア・５グリッド | 石匙 | 油母頁岩 | 41 | エ・６グリッド | 石核 | チャート |
| 12 | | 石匙 | チャート | 42 | ア・６グリッド | 石核 | 玄武岩 |
| 13 | ウ・５グリッド | 石錐 | 玄武岩 | 43 | ア・５グリッド | 石核 | 玄武岩 |
| 14 | イ・４グリッド | 石錐 | 黒耀石 | 44 | | 石核 | 玄武岩 |
| 15 | イ・４グリッド | フレイク | 黒耀石 | 45 | | 石核 | 玄武岩 |
| 16 | | 石鏃 | 玄武岩 | 46 | | 凹石 | 安山岩 |
| 17 | ウ・５グリッド | 石鏃 | 黒耀石 | 47 | | 礫器 | 砂岩 |
| 18 | ウ・７グリッド | 石鏃 | 玄武岩 | 48 | エ・５グリッド | 砥石 | 砂岩 |
| 19 | ウ・７グリッド | 石鏃 | 玄武岩 | 49 | ア・６グリッド | 凹石 | 安山岩 |
| 20 | ウ・３グリッド | 石鏃 | 黒耀石 | 50 | | 凹石 | 安山岩 |
| 21 | ウ・４グリッド | 石鏃 | 黒耀石 | 51 | | 凹石 | 安山岩 |
| 22 | ウ・８グリッド | 石鏃 | 黒耀石 | 52 | | 石鏃 | 黒耀石 |
| 23 | | 石鏃 | 黒耀石 | 53 | | 石鏃 | 黒耀石 |
| 24 | ウ・１グリッド | 石鏃 | チャート | 54 | | 石鏃 | 黒耀石 |
| 25 | ウ・７グリッド | 石鏃 | 黒耀石 | 55 | | 焼礫 | 安山岩 |
| 26 | イ・４グリッド | 石鏃 | 黒耀石 | 56 | | 磨痕のある石 | 安山岩 |
| 27 | | 石鏃 | 玄武岩 | 57 | | 凹石 | 溶結凝灰岩 |
| 28 | | 石鏃 | チート | 58 | | 石鏃 | 黒耀石 |
| 29 | ウ・６グリッド | 石鏃 | チャート | 59 | | 石鏃 | 黒耀石 |
| 30 | | 石鏃 | 黒耀石 | 52～59は挿図なし | | | |

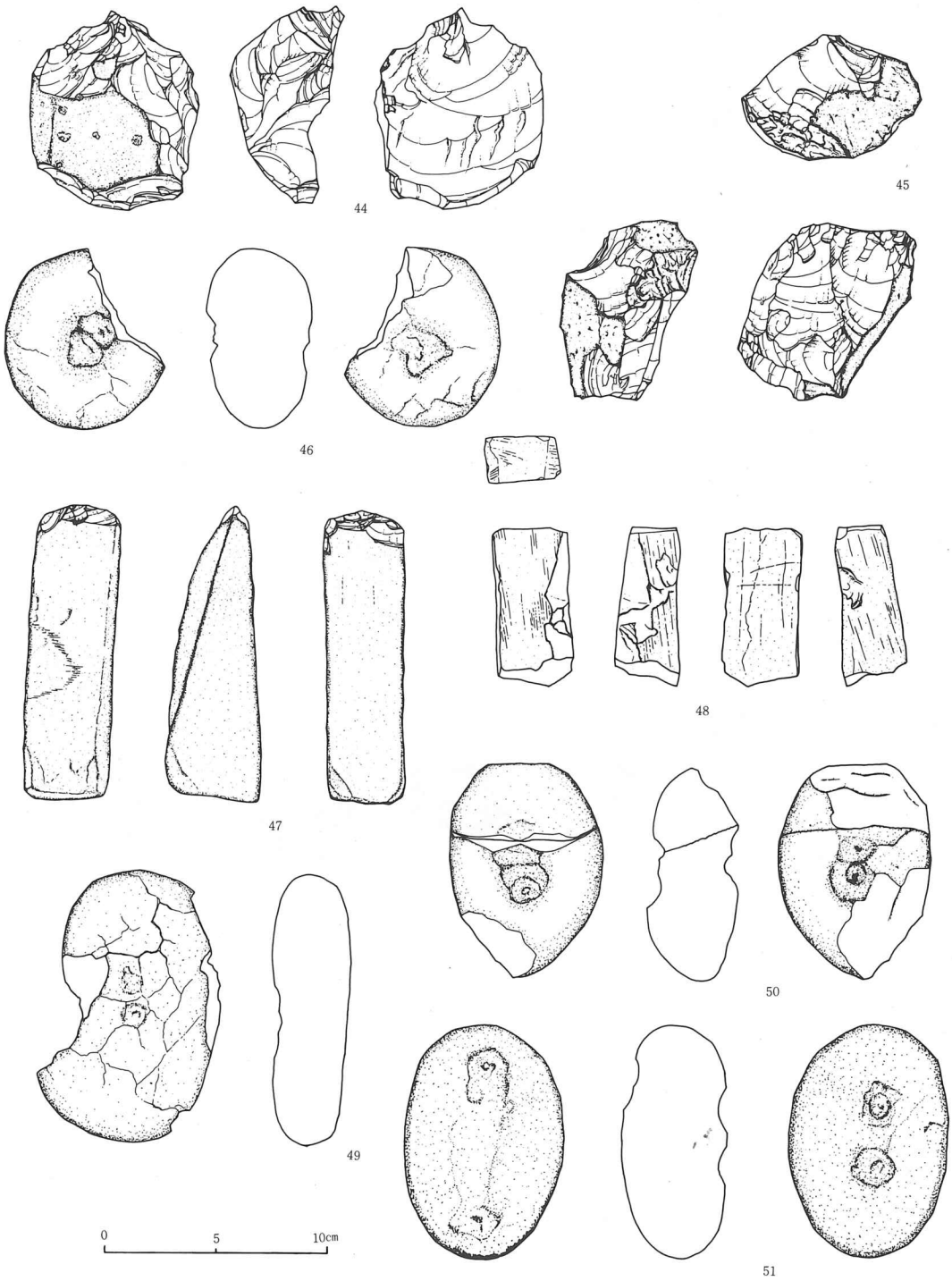
注：出土位置欄が空白のものは、別に、第３図に表わしてある。




第６図　五斗代Ｂ遺跡出土石器（１：２）




第７図　五斗代Ｂ遺跡出土石器実測図（１～33）（１：２）（34～43）（１：３）




第８図　五斗代Ｂ遺跡出土石器実測図（１：３）

## 3　石　器　（第6図　第7図　第8図　図版5　図版6　図版7）

五斗代B遺跡において検出された石器及び石片の内訳は次のとおりである。

- 石鏃……21点　（黒耀石13　玄武石5　チャート3）
- 石匙……9点　（黒耀石2　玄武岩3　チャート3　油母頁岩1）
- 石錐……2点　（玄武岩1　黒耀石1）
- スクレパー……5点　（玄武岩5）
- 打製石斧……5点　（玄武岩4　砂岩1）
- 剥片石器……2点　（黒耀石2）
- 礫器……1点　（砂岩1）
- 石核……7点　（玄武岩4　チャート3）
- くぼみ石……5点　（安山岩4　溶結凝灰岩1）
- 砥石……1点　（砂岩1）
- 線刻のある石…1点　（砂岩1）
- 総計……59点　（玄武岩22　黒耀石18　チャート9　砂岩4　油母頁岩1　安山岩4　溶結凝灰岩1）
- 玄武岩塊（こぶし大、打ちかきがある）……22点
- 玄武岩破片（大きさが5㎝以上のもの）……262点　●玄武岩砕片……約1000点
- 黒耀石片……95点　●チャート片……15点　●油母頁岩片……3点

縄文時代の石器製作は、先土器時代でいう○○技法といったようなしっかりした形でとらえることはできない。しかし、石鏃、石匙等の小型石器が剥片剥離技術の所産であることはいうまでもないだろう。（註1）、（註2）

本遺跡においても、剥片剥離技術を物語るものとして、石核が7つ検出されている。これらの石核の形状は一定ではなく、打点撰択にも適応性がみられるものの、41・42・43・45の石核には明らかに剥離の規則性がうかがえる。また42・44・45の各石核には打面調整が施こされている。39・40・41のチャート石核は、残念ながら接合はみられなかったものの同一母岩とみられる。39 40・は1m内外の近接した位置から出土した。

石匙は9点出土した。（第6図）その中で石核から剥がされた段階の第1剥離面が観察できるものがある。その観察より、縦長剥片を利用した石匙は1・4・5である。1・4・5ともに縦長の石匙である。また横長剥片を素材としたものは6・8・9・12であるが、このうち縦長の石匙は8で、6・9・12は横長の石匙である。こうした相関関係は、素材の形状によって石器の形

態が左右されたことをしめすものであろう。

いずれにせよ縄文時代の剝片石器のインダストリーがある程度の企画性をもって行なわれていたことは事実であろう。（註３）

板状礫を利用したものが多い打製石斧は、剝片剝離技術のわく外でとらえることができよう。（註４）　従来打製石斧は34などの短冊形、36などの撥形、この他分銅形と大きく三分類されている。これらの三形態は時期的に異なった隆盛を示めすようであるが、機能的にも異なった用いられ方が想定できる。

その他、スクレパーとしてとらえられたものは玄武岩製の不定形なものが主である。

33にみられる「きず」は線刻なのか、石器等のリタッチによるものなのかは不明である。

製品としての石器の総計は59点であるが、このうち48の砥石は後世（平安時代？）のものと思われる。縄文時代の石器で使用痕のみあたるものはなかった。そうした中でくぼみ石を除いた石器のおおまかな傾向として玄武岩製のものが多いことがあげられよう。さらに製品としてはとらえられなかったものの玄武岩塊は石核に準ずるようなものではないだろうか？千数百点を数えた玄武岩の破片が石器製作の際に生じたものであることは明らかであろう。

（堤　隆）

註１　剝片剝離技術とは、ひとつの石材（原石あるいは調整された石塊）から、石器にしようとする剝片を複数、継続して剝取する技術である。そこから生み出された剝片石器は、石核石器と対比できよう。

註２　宮城県上深沢遺跡では剝片剝離技術による石器を４群に大別している。第１群は尖頭部と基部からなるもの、第２群つまみ部と身幅の広い刃部からなるもの、第３群つまみ部と尖頭状の錐部からなるもの、第４群不定形なもの、となっている。従来、第１群は石鏃、第Ⅱ群は石匙、第Ⅲ群は石錐と呼ばれているものである。しかし、こうした名称がいかなる意味を持つのかは明らかにされてはおらず、むしろ混乱を招いているようである。さらに剝片については形態、打面、打点、打角等、石核については打面、打面転移、打角等の分析がなされている。しかし、石器のインダストリーの復原にまでは至っていないようである。

宮城県教育庁文化財保護課編　1978　「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ　上深沢遺跡」　日本道路公団・宮城県教育委員会

註３　通例、縄文時代の石器は可能なかぎりにおいて再生がくり返しおこなわれるため、製作のプロセスを示すものが残りにくい。したがってその剝離技術の復原も困難である。

鈴木次郎氏の御教示による。

註４　打製石斧の大部分は、剝片石器と対比される石核石器としてとらえることができよう。

# Ⅵ 総　　括

縄文文化研究の視点は、従来の土器編年、土器型式学的研究から縄文人のくらしや社会の究明に移行しつつある。そうした中で、縄文時代において人々が生業活動を行うための直接生産用具である石器に関しても、当然ながら光があたってきた。さらに戦後著しく進歩した先土器時代の方法論などの応用も見られるようになった（註１）

縄文時代の石器研究の方向は大きく３つに分けられるといってよいだろう。ひとつはインダストリーに関する研究である。それは石器の用材の撰択についてや、接合資料、個体別資料等の観察によるテクノロジーの復原などを研究対象とする。ふたつめは、石器の組成や数量のちがいなどセトルメントパターンの追求である。自然環境の地域差は縄文人の生業活動にも大きなちがいをもたらす、当然それに比例して石器の組成等も異なってくるであろう。さらにもうひとつは、これらの発展問題としての機能に関する考察である。それについてはこれまで１部研究者による縄文農耕を前提とした「農具としての石器」の位置づけの他は、これといった研究がみられずあいまいなものであった。（註２）石器の機能想定には、演繹法ともいうべき民俗事例の応用と、帰納法である石器の各種属性の分析のバランスが要求される。

また、こうした研究を進めるにあたっての基礎となる石器の分析法についても問題がある。まず石器の石質の同定について研究者の感覚認識にたよりすぎているきらいがある。（註３）石器の石質の同定は科学的見地に立ったものが望ましい。石器の名称にも氾濫がみられる。たとえば何々に似ているからといって安易に○○石器としたり、反対に、従来の範疇にないからといって不定形石器でかたずけてしまうような傾向がある。石器の名称はあくまで機能的な側面から、普遍的なものがあたえられなければならない。

いずれにせよ縄文時代の石器研究には、先土器時代のものまねでなくそれにふさわしい方法が必要であろう。そしてそれは石器のみに終始するのではなく、他の遺物、遺構、自然環境等々、人間のくらしとの有機的な関連を明らかにするものでなくてはならない。

五斗代Ｂ遺跡の礫群が、縄文時代前期の石器製作をになうなんらかの機能をはたしてきたことは明らかになった。そこでは附近からの入手の簡単な玄武岩を主体として石器製作がおこなわれていた。これまで縄文時代の石器に関して、製作技術の面からの追求はほとんどみられなかった。しかし、五斗代Ｂ遺跡は、縄文時代の石器のインダストリーを究明するうえで格好な資料をあたえてくれている。今後これらの資料が前半に記したような問題点をふまえさらに分析されることが望ましい。遺跡全体についていえば、調査区域の制約から礫群のユニット全体を検出すること

ができなかった。いったいこの礫群はどれぐらいの広がりを持つのであろうか？さらにマクロな視点からみると、これを利用した人々の居住区域は礫群とどれほどのへだたりがあるのだろうかそして附近に存在する縄文時代の遺跡とはどのような関連があったのか？

佐久市内有数の縄文遺跡の、密集する香坂一帯は、近年通過する関越自動車連、上越新幹線、それに伴う開発によって今後多くの緊急調査をみることになるだろう。幸か不幸かこういった破壊行為の代償としてこれらの問題も徐々に明らかになってゆく点もあろうが、しかるべき保存保護の処置が早急にとられなければならない。　（林幸彦　堤　隆）

註１　岡村道雄氏は旧石器研究法が縄文時代の石器に応用された例として次の点を指適している。①石器を群でとらえる方法　②石器出土状況の記録化　③石器の各器種の属性分析を基盤にした個別研究　④剝片生産技術を中心とした石器製作技術の観察　⑤石器の機能的研究　⑥石器実測法などである。

岡村道雄　1979　「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例ーその１ー」　東北歴史資料館研究紀要第５巻、東北歴史資料館

註２　小林公明　1977　「縄文中期八ケ岳南麓における農具としての打製石器」　「信濃」29ー４

五味一郎　1980　「縄文時代早、前期の石匙ーその農具としての定立」　「信濃」32ー７

註３　佐久でこれまで頁岩、粘板岩としてとらえられていた石器の１部が玄武岩製であることが判明した。これを契機に石質の再同定が必要となろう。

## 引　用　参　考　文　献


中央道遺跡調査団編　1972　「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書ー南箕輪村その１２　北高根Ａ」　日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会

林　茂樹　1978　「高遠宮の原遺跡」

藤森　栄一　1965　「縄文農耕」　学生社

中村　龍雄　1980　「諸磯Ｃ式比定土器ーその２ー１」

宮坂　光昭他　1966　「海戸」岡谷市教育委員会

八幡　一郎　1976　「信濃大深山遺跡」　川上村教育委員会

宮坂　英弐　1957　「尖石」　茅野町教育委員会

戸田　正勝他　1974　「基石遺跡」　大船渡市教育委員会

八幡　一郎　1979　「縄文文化研究　２巻」　雄山閣

井出　正義・林　幸彦他　1979　「宮の本」　佐久町教育委員会

1　礫　　群（ア5.6，イ5.6グリット北方より）

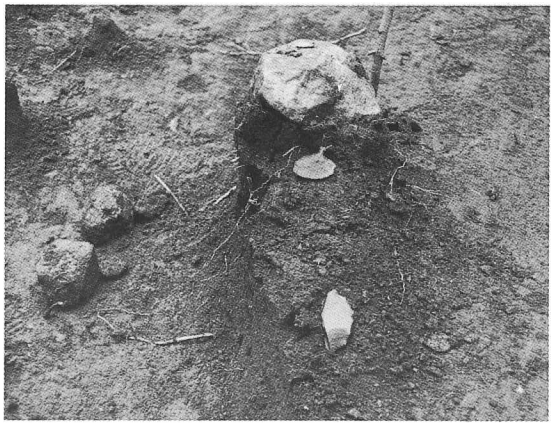
2　礫　　群（イ5,6，ウ5.6グリット西方より）

図版二

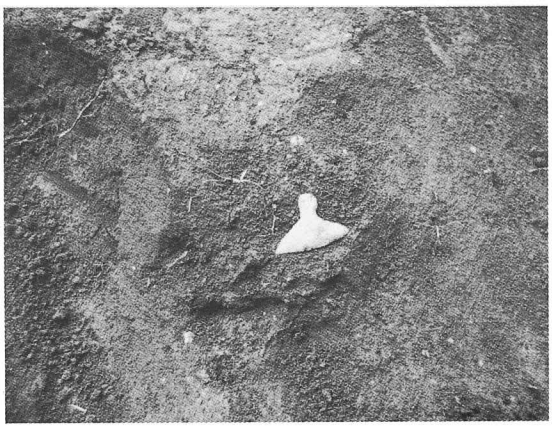
1 発堀区全景(北方より)

2 発堀区（イ20、21グリット南方より）

3 礫群内石匙出土状態（第6図 4）

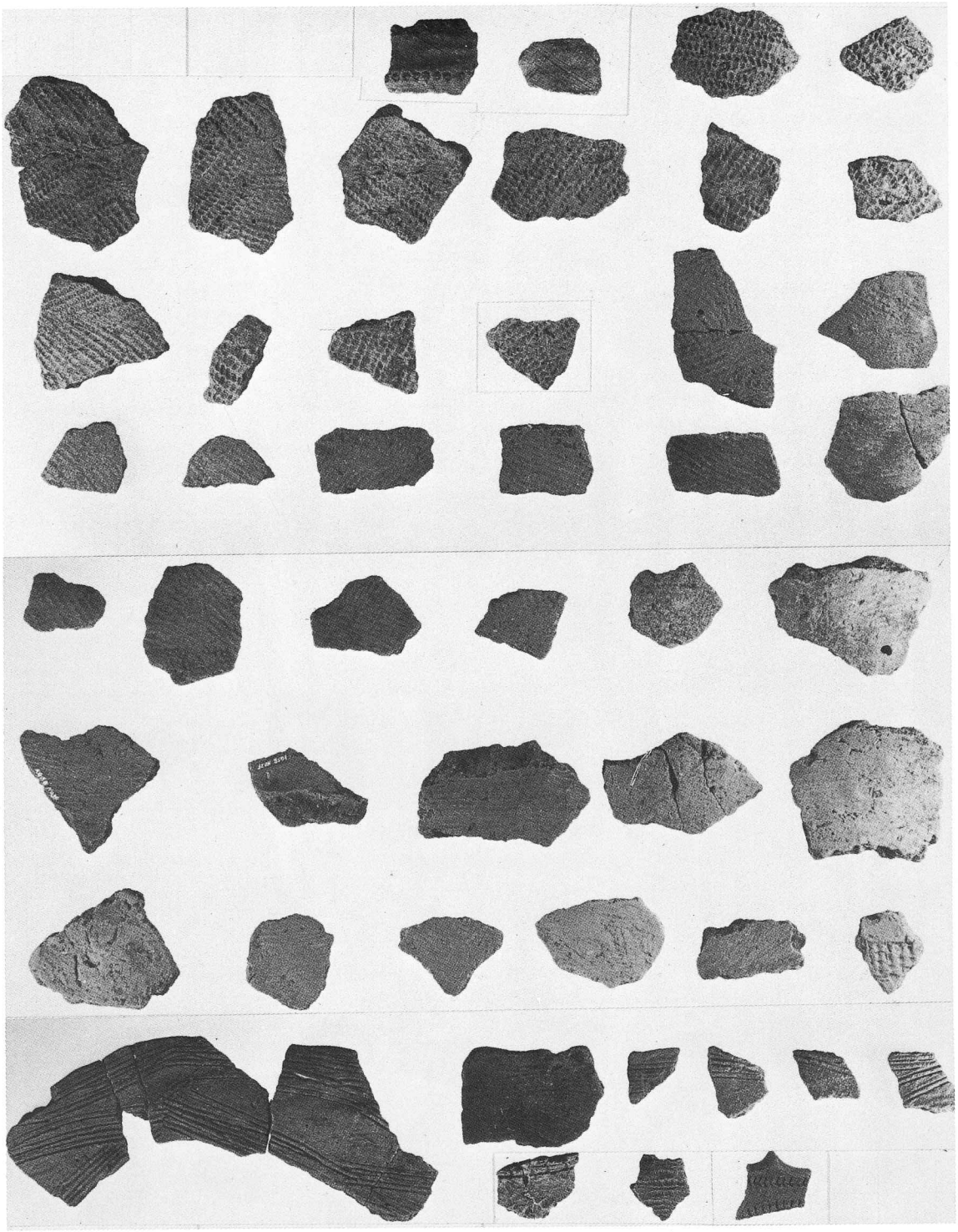


4 礫群内石匙出土状態（第6図 9）



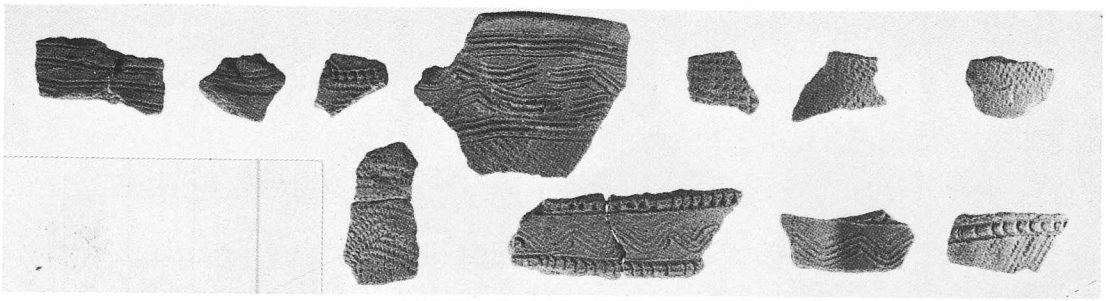
5 礫群内石匙出土状態（第6図 10）

6 礫群内石鏃出土状態

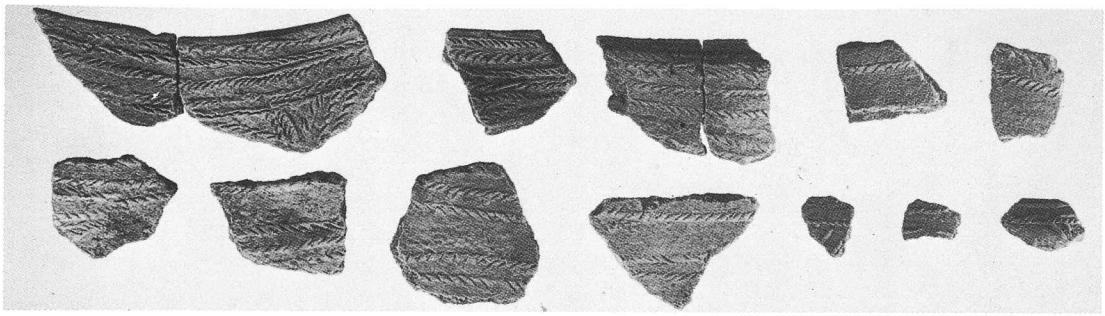


1　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器（木島・花積下層・黒浜比定期）（1：3）

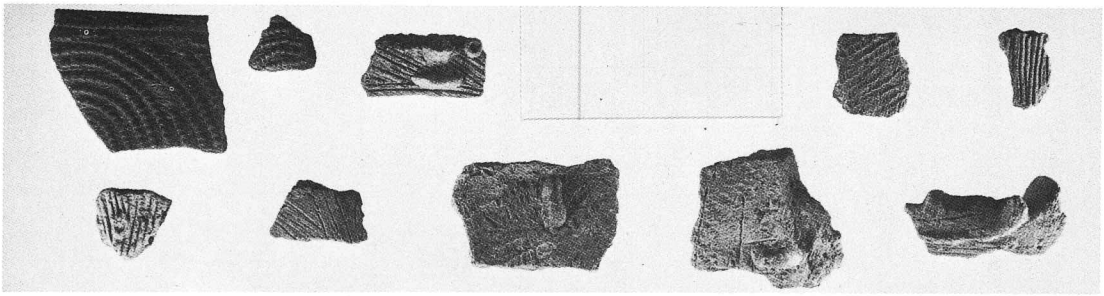
図版四



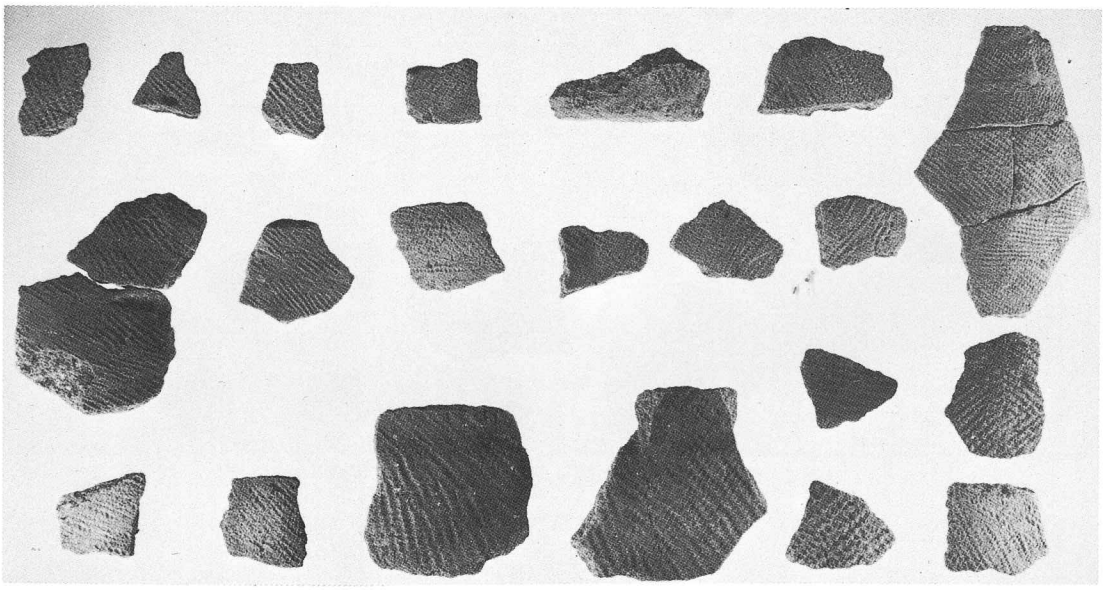
1　第Ⅳ群土器（諸磯Ａ比定期）（１：３）



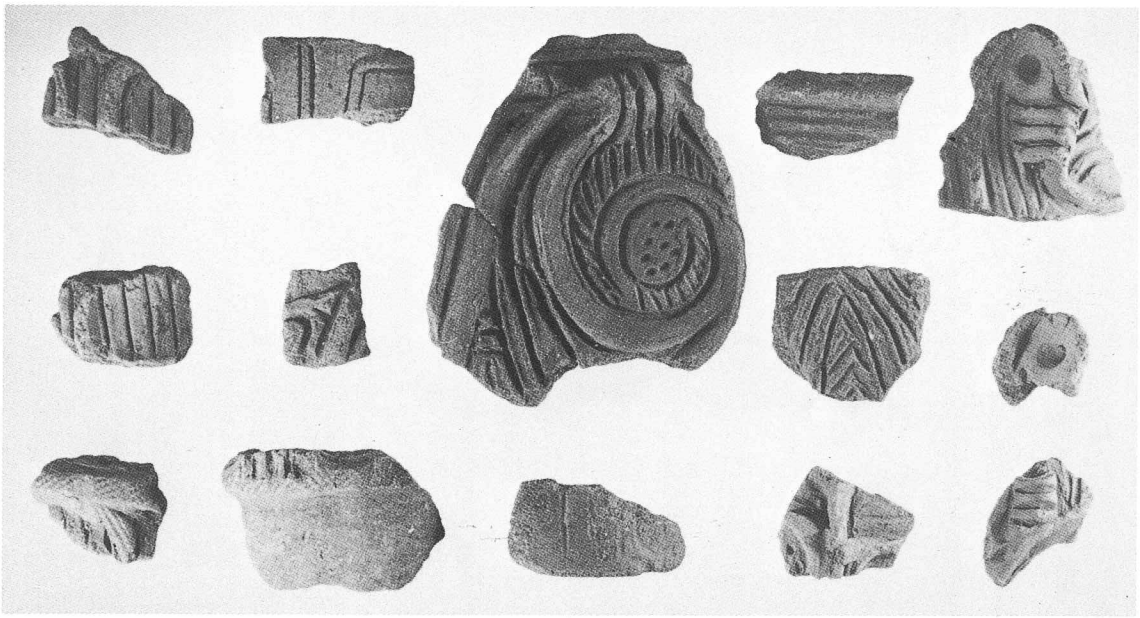
2　第Ⅴ群土器（諸磯Ｂ比定期）（１：３）



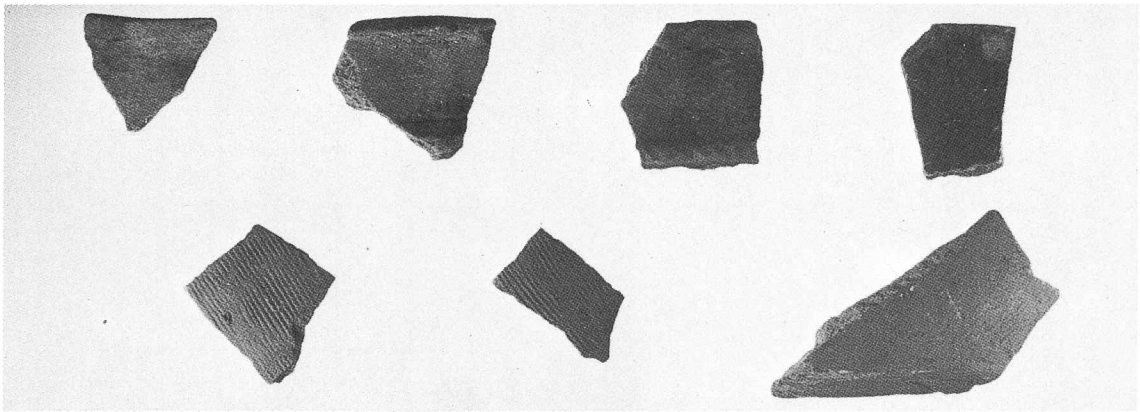
3　第Ⅵ群土器（諸磯Ｃ比定期）（１：３）



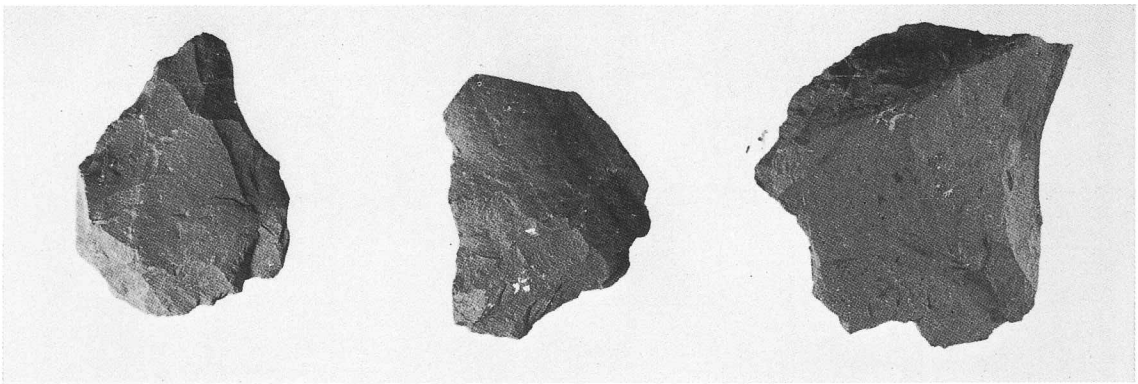
4　第Ⅶ群土器（前期・該期不明）（１：３）



1　第Ⅷ群土器（勝坂比定期）　（1：3）

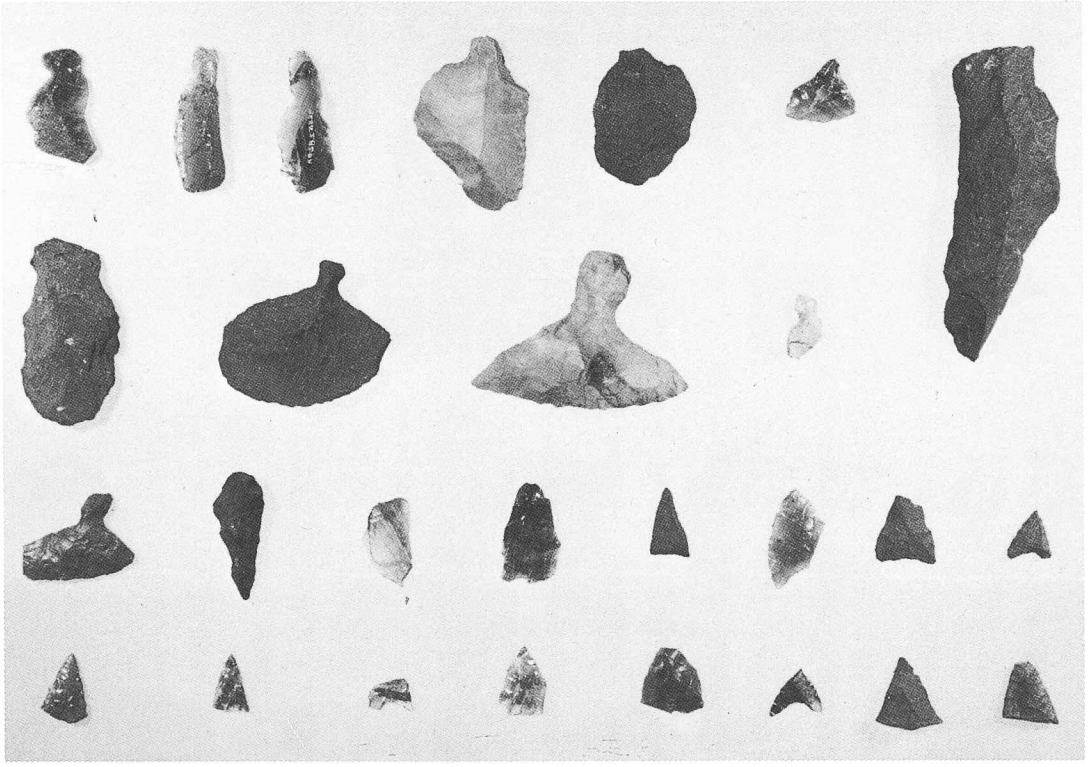


2　策Ⅸ群土器（縄文後期・該期不明）（1：3）
第Ⅹ群土器（平安時代・国分比定期）（1：3）

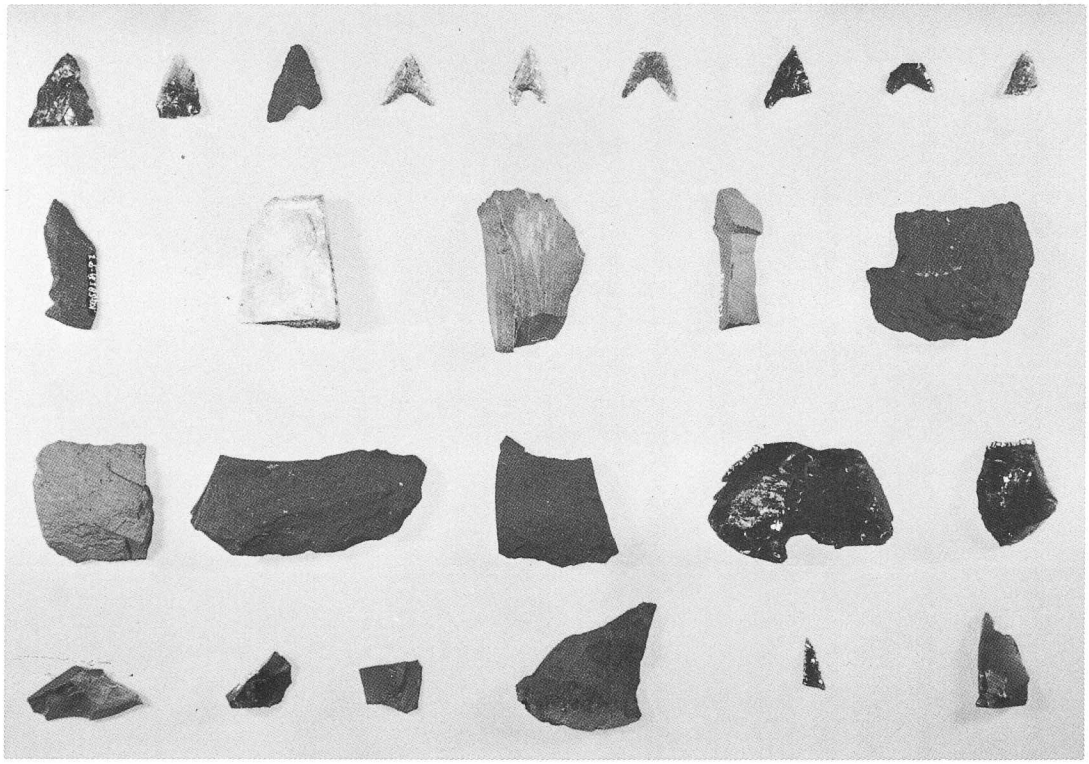


3　礫群内出土　玄武岩塊（1：3）

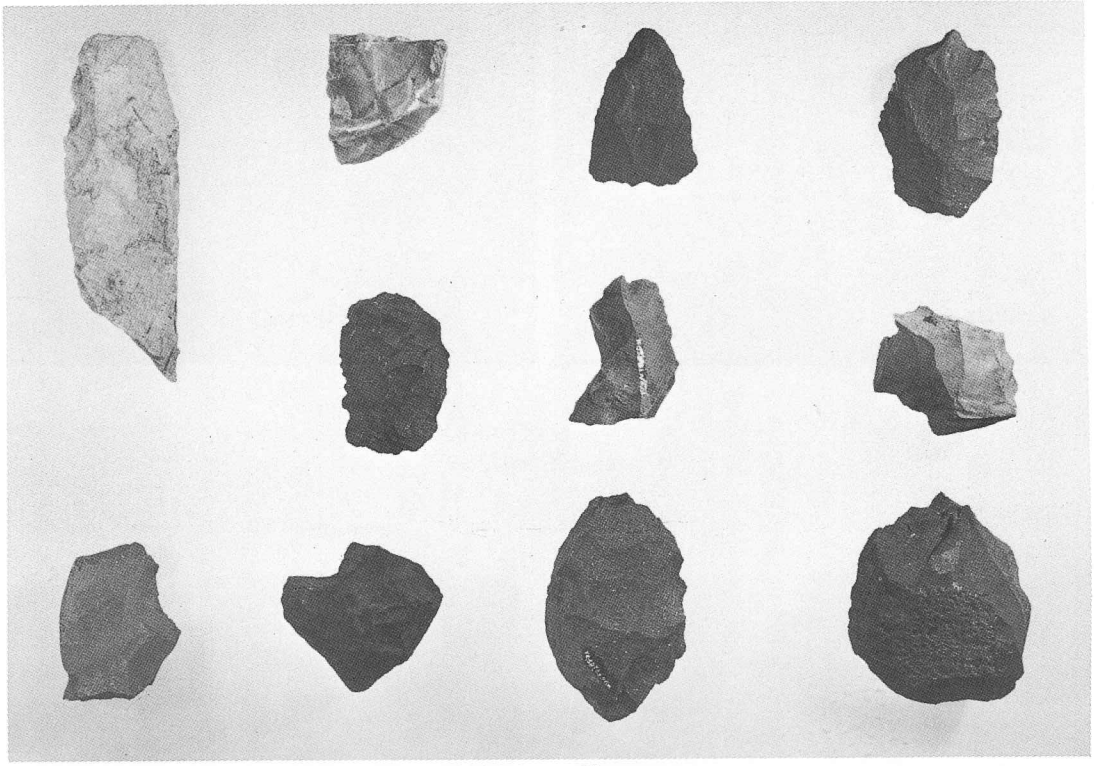
図版六



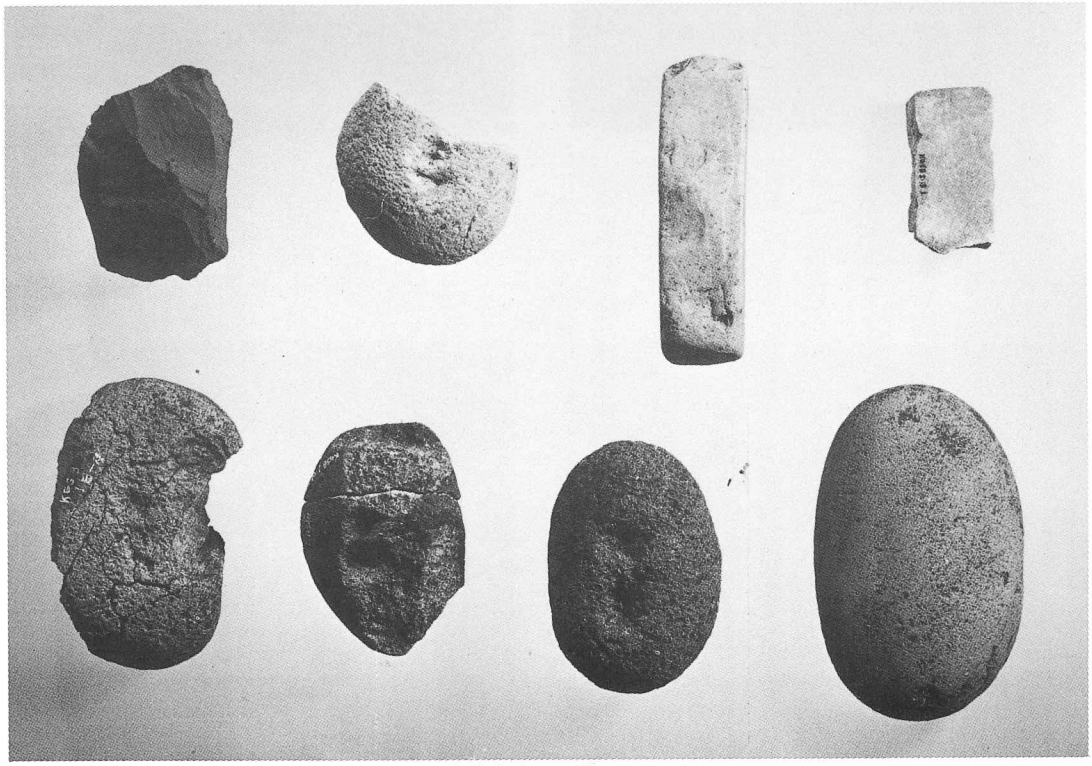
1　礫群内出土石器（2：3）



2　礫群内出土石器（2：3）

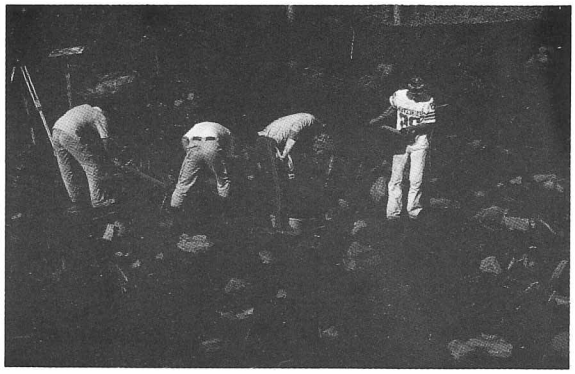


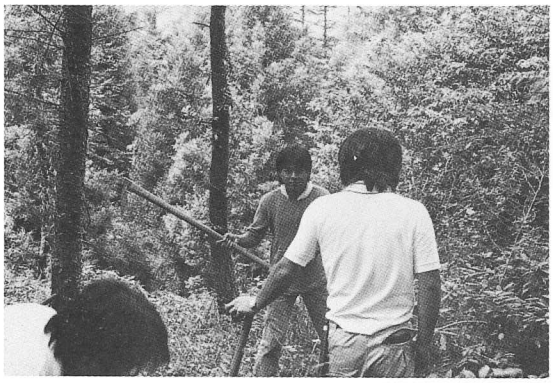
1　礫群内出土石器（1：3）

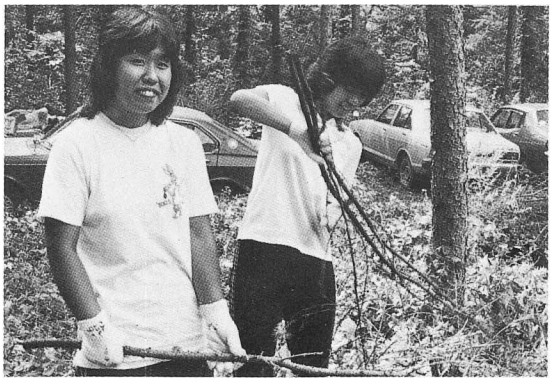


2　礫群内出土石器（1：3）

図版八







**五斗代B遺跡**

長野県佐久市香坂五斗代B遺跡発掘調査報告書

昭和56年3月発行

編集者　**五斗代B遺跡発掘調査団**

発行者　**長野県佐久市教育委員会**

印刷所　**株式会社　佐久印刷所**